

農業者大学校広報誌「のうしゃだい」 第3号

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-12-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24514/00004569

のうしやだい

3

2011/3

41期卒業生の 就農状況紹介

園田 成生さん 森口 雅也さん
堀井 高志さん 横尾 正明さん
村岸 豊さん

農業者大学校
NATIONAL FARMERS ACADEMY

- 平成22年度先進経営体等派遣実習の状況
- 先進経営体等見学
- 平成22年度研究チーム派遣実習の状況
- 地域総合課題演習
- 校内トピックス

農業者大学校サマーセミナー 2010
伝統の豊饒祭 今年も大盛況!! など

■ お知らせ

本校を取り巻く状況の変化

41期卒業生の

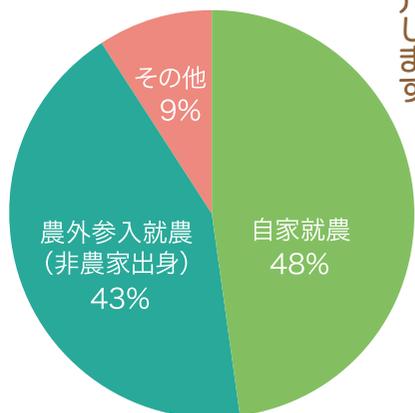
就農状況

紹介

昨年3月、つくばでの新たな教育課程最初の卒業生が全国各地に巣立って行きました。農家出身の学生と非農家出身者の学生がほぼ半々という構成でしたが、自家就農、農業生産法人での就職就農、就農希望地での農家研修など、それぞれ就農への道を歩み出しており、就農率は9割を超えています。

彼らにとっては、日々のすべてが初めてのことであり、戸惑い・悩みながらも、農業者大学校で学んだ多くの知識・スピリットを胸に、力強くかつ着実に農業経営者への道を歩んでいます。そんな彼らの近況を紹介します。

【22年3月卒業生進路状況】



園田 成生 さん

園田さんは鹿児島県立農業大学校を卒業後、農業者大学校に進学しました。実家は葉タバコを基幹に水稲、飼料作物、サツマイモなどを栽培する専業農家で、卒業後は実家で就農しています。

現在は、父親と共に働き、農産物の品質を下げずに収量を上げることに心がけています。また、昨年は、米のパッケージを作ったり、個人販売用のサンプルを配布したりと米の販路拡大の取り組みを始めたそうです。葉タバコの将来性に不安を感じており、農業機械と土地を活かすことができる作物への転換を模索しているとのことでした。

本校では、自分自身を見つめ直す時間がとれてよかったとのことでした。



堀井 高志 さん

堀井さんが住む京都府城陽市青谷は、京都と奈良の中間に位置し、府下随一の梅林で知られています。

堀井さんは、現在、果樹経営を継ぐべく、祖父から梅と柿の栽培技術の伝授を受けています。農業者大学校在学時の果樹研究所への研究チーム派遣実習が大いに役立ついるそうです。

地域では唯一の若手農業者として、消防団・JA・教育等地元に着した活動にも積極的に参加するほか、インターネットでの農産物販売に取り組むなど、バイタリティに富んだ活動をしています。さらに、今後は看護師としてのキャリアを活かし、健康に寄与する農産物づくりを目指していくそうです。

後輩に対して「大先輩の話聞くのも悪くはないが、時代は変わっている。みんなは、来年や再来年に自分がどうなっていくのかについてアドバイスが欲しいはず。機会があれば話をしたい。」とのことでした。





村岸 豊 さん

京都駅から電車で1時間半、さらに30分バスに揺られて漸くたどり着く四方を山で囲まれた集落、京丹波町下栗野で村岸さんは元気に頑張っています。

非農家出身の村岸さんは、農業者大学の就農支援活動を通じ、この地に農地付きの空家を借り受けました。現在、地域の特産物である黒大豆（枝豆）を中心に、水稲や野菜を栽培しています。生活面や技術面については地域の世話役の指導・協力を得つつ、また、京都市在住の両親の支援も得て、試行錯誤を重ねながらですが農業者への道を歩んでいます。今後は経営規模の拡大と、指名して買ってもらえる「村岸ブランド」づくりを進めたいとのこと。

村岸さんは後輩に対し、「難しく考えているとチャンスを逃してしまふ。失敗しても良いという覚悟を持つこと。失敗してもその中から得られるものも多くあるのだから。」と励まします。



森口 雅也 さん

森口さんは、現在つくば市内の石田農園でタマネギ、ニンジン、ホウレンソウなどの野菜の有機栽培を行っています。

在学中、将来の就農について悩んでいましたが、学校での講義や現地見学を通して、自ら経営者となつておいしい農産物を提供したいと思い、法人への就職ではなく独立就農を決意しました。卒業後は、独立就農のモデルとして在学中から研修でお世話になっていた石田農園で、引き続き研修することにしました。

在学中に営農計画を作成して認定就農者になり、独立に向けての手続きをはじめ、農地、資金、資材購入、販売ルートなどの情報は、学校や茨城県のほか、石田農園から支援を受けています。

近々つくば市内に農地を借りて小さい規模から農業を始めたいと準備を進めています。

将来新規就農を目指す後輩には、希望する就農の地域や営農計画を早めに立てて、近くの農家で研修をしながら準備をする必要があるとのアドバイスをもらいました。



横尾 正明 さん

横尾さんは東京都新宿区の出身で、入学当初は屋上緑化や園芸福祉に関心がありましたが、農作業実習や派遣実習に取り組んでいく中で実際に農業をやりたいとの思いが強くなり露地野菜の法人就職への道を選びました。

在学中に知人からつくば市内でケール栽培と青汁の製造販売をしている(株)ベルファームを紹介され、昨年4月、卒業と同時に就職しました。

2年程の農業研修をした後に独立就農する先輩がいる中で、横尾さんは入社1年目で独立した農場長として経営を任されることになりました。農業資材やスタツフなど会社がバックアップしてくれますが、責任と期待にプレッシャーがかかっています。

将来の経営については、自然の流れに逆らわない、自然と調和した農業を目指しています。都会育ちで当初戸惑っていた農村社会の慣習や人間関係にもだいぶ慣れてきたようです。大事なのはやる気とコミュニケーションだということです。

平成22年度 先進経営体等派遣実習の状況

● 渡部さん(加藤農園・埼玉県)

7月29日、埼玉県北本市で施設トマトの生産・直売を中心とした水稲野菜複合経営を行っている加藤農園で実習中の渡部さんを訪問しました。加藤さんのお宅はこの地で800年続く農家です。森に囲まれた大きなお屋敷は「豪農」といった雰囲気がありました。

渡部さんは早朝から午前中はトマトの収穫作業に追われ、午後からは直売所に関する作業や露地野菜の収穫、ハウス内の除草、ミニトマトの脇芽かき作業など、収穫から販売まで一連の作業を精力的になされており、訪れた日も収穫した枝豆の枝葉を整理しテープで綺麗に纏めて商品に仕上げる作業を黙々とこなしていました。この暑さもあつて大変な様子でしたが、その中でも小さな娘さんも一緒に手伝うなどアットホームな雰囲気も感じられました。

加藤さんからは現在に至る経営の経緯から今抱える問題点と、それを踏まえた将来展望までお話を伺うことができました。その中で言われていたことの一つに、技術の伝承の問題がありました。この地域も他の多くの地域と同じく、後継者がおらず、地域で技術を伝えるなければ途絶えてしまうので何とかしなければと思っていますとのことでした。



学生の渡部さん(右)↑

● 岩井さん(久保田農園・新潟県)

8月3日、新潟県上越市でトマト、キュウリの施設栽培を大規模に行っている久保田農園で実習中の岩井さんを訪問しました。

お父様の代から施設栽培に取り組みされてきた久保田農園は現在、全国野菜園芸技術研究会の事務局長も務める隆重さんを中心に、御年88歳にしてお元気に農作業をなさるお父様、32歳の働き盛りの息子さんの3世代のご家族で経営されています。

ハウスの中の作業が中心となるため、今年のような猛暑ではハウス内の気温は40℃近くなる過酷な状況とありますが、その中でも岩井さんは熱心に実習に取り組んでおり、お父様からも「音を上げずによく頑張っている」とのお言葉がありました。

隆重さんから、農園の概要を説明していただくとともに、経営していく上での地域や組織との繋がり、付き合い方、情報の集め方などをお願い、実習の残りの期間も引き続きご指導をお願い致しますとご挨拶して、久保田農園を後にしました。



↑学生の岩井さん(左)

先進経営体等見学

先進経営体等見学は、経営者の方々から直接経営の概要や栽培技術、経営理念、農業観など幅広い話を聴くとともに、先進的なほ場や施設等の現場を見ることにより、各自が将来目指す農業経営の参考とするものです。

今年度は、6月23日から2泊3日で1都3県7か所を見学しました。

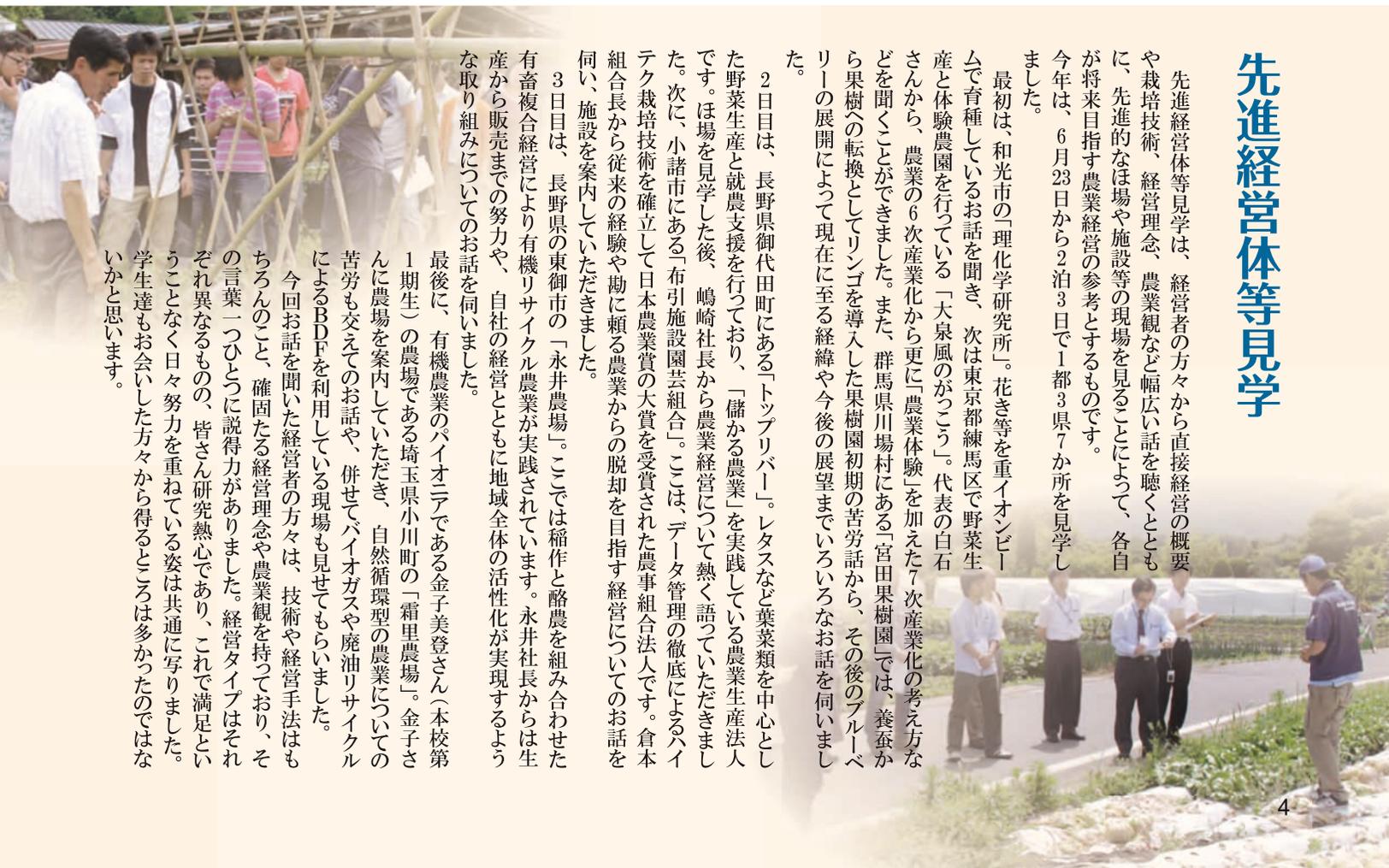
最初は、和光市の「理化学研究所」。花き等を重イオンビームで育種しているお話を聞き、次は東京都練馬区で野菜生産と体験農園を行っている「大泉風のがっこう」。代表の白石さんから、農業の6次産業化から更に「農業体験」を加えた7次産業化の考えなどを聞くことができました。また、群馬県川場村にある「宮田果樹園」では、養蚕から果樹への転換としてリンゴを導入した果樹園初期の苦労話から、その後のブルーベリーの展開によって現在に至る経緯や今後の展望までいろいろなお話を伺いました。

2日目は、長野県御代田町にある「トップバニー」。レタスなど葉菜類を中心とした野菜生産と就農支援を行っており、「儲かる農業」を実践している農業生産法人です。ほ場を見学した後、嶋崎社長から農業経営について熱く語っていただきました。次に、小諸市にある「布引施設園芸組合」。こは、データ管理の徹底によるハイテク栽培技術を確立して日本農業賞の大賞を受賞された農事組合法人です。倉本組合長から従来の経験や勘に頼る農業からの脱却を目指す経営についてのお話を伺い、施設を案内していただきました。

3日目は、長野県の東御市の「永井農場」。ここでは稲作と酪農を組み合わせた有畜複合経営により有機リサイクル農業が実践されています。永井社長からは生産から販売までの努力や、自社の経営とともに地域全体の活性化が実現するような取り組みについてのお話を伺いました。

最後に、有機農業のバイオニアである金子美登さん(本校第1期生)の農場である埼玉県小川町の「霜里農場」。金子さんに農場を案内していただき、自然循環型の農業についての苦労も交えてのお話や、併せてバイオガスや廃油リサイクルによるBDFを利用している現場も見せてもらいました。

今回お話を聞いた経営者の方々には、技術や経営手法はもちろんのこと、確固たる経営理念や農業観を持っており、その言葉一つひとつに説得力がありました。経営タイプはそれぞれ異なるものの、皆さん研究熱心であり、これで満足ということなく日々努力を重ねている姿は共通に写りました。学生達もお会いした方々から得るところは多かったのではないかと思います。



平成22年度研究チーム派遣実習の状況

平成21年度から始まった研究チーム派遣実習は、2年生を対象に、農研機構の研究機関の第一線の研究者の指導等を通じ、先端的な農業技術や科学的なものの考え方を身に付けるもので、つくばでの新教育課程の目玉のひとつとなっています。今回は果樹研究所と作物研究所での実習の様子を紹介します。

落葉果樹の栽培管理と品種特性を理解する

果樹研究所 ナシ・クリ・核果類研究チーム（6月24日訪問）

ナシ・クリ・核果類研究チームでは、食味が良く栽培性に優れたホシナシ、クリ、核果類（モモ、ウメ、スモモ、アンズ）の新品種を育成しています。今年度は古屋さん、前原さん、藤井さんの3人がこの研究チームで実習しました。写真は、ウメなどの核果類の収穫後の調査の様子です。果実の品質調査では、果実の重さ、糖度、酸度、硬度、蜜症の発生、食味などを調査しました。3人はこの研究チームでの実習を通じて、ホシナシ、モモ等落葉果樹の栽培管理と品種特性について理解が深まったようです。また、卒業後の経営に役立つ研究者との人脈も築けたようでした。



↑手前から学生の古屋さん、前原さん、藤井さん

多様なサツマイモ品種の特徴を理解する

作物研究所 食用サツマイモチーム（10月14日訪問）

食用サツマイモチームでは、良食味の青果用や加工適性の優れた干しいも加工用のサツマイモ品種の育成、新たな有用特性を持つ育種素材の開発などを行っています。今年度この研究チームで実習したのはサツマイモ農家出身の前濱さん。写真は、育種選抜のためのほ場でサツマイモを掘り上げている様子ですが、さすが農家の息子、危なげなくトラクターを操っていました。前濱さんは、「新品種を作るには多くの時間と労力を必要とするのが実際に選抜作業等を体験してみても分かった。良さそうな新品種を卒業後に家で栽培してみたい。」と語っていました。



↑学生の前濱さん

地域総合課題演習

地域総合課題演習では、農村地域の課題解決のためのマネージメント手法を講義・現地調査・見学を通して学び、併せて、我が国の食料・農業・農村の現状と課題・今後の方向についての知識と理解を深めていきます。

この演習の一環として10月18日～19日に実施した農村調査では、つくばみらい市寺畑（てらはた）地区を訪問しました。ここでは、NPO法人「古瀬（ふるせ）の自然と文化を守る会」が中心となり、地域の自然・風景や伝統行事の保存活動、都市や学校等との交流を行っています。

調査当日は、寺畑地区に住んでおられる同NPO法人の方だけでなく、つくばみらい市役所、JA茨城みなみなど関係する沢山の方々に対し精力的にインタビュー・調査を行い、地域の農業・産業や生活の状況、地域の課題や希望、活用できそうな資源など、寺畑地区を理解し活性化を考える上で必要な事柄について調べました。2日目になると、賄いに来ていただいた主婦の方からお話を聞いたり、昔をよく知るお年寄りを紹介してもらい、お宅を訪問して話を聞かせてもらったり、また、散歩に来てくれる方に声を掛けると隣の地区の区長さんだったりするなど、色々な方から思わぬ話も聞くことが出来ました。

食事はこの辺りに伝わる「太郎兵衛もち」というもち米を使ったおこわや、かまどで炊いたごはん、また、宿泊もNPO法人の管理する古民家「松本邸」など、地域の良さをたっぷりと感じることが出来ました。

3日目には大学校に戻り、寺畑地区をどのように理解したか、更に同地区を活性化するにはどのようにすれば良いかをグループ毎にまとめました。



夢と希望を胸に 43期生31名が入学

校内 トピックス

4月8日に平成22年度の入学式を
挙行了しました。

当日は、農林団地の桜が咲き乱れる中、青く澄み切った清々しい晴天の下、第43期の新入生31名を迎えることができました。

今年の入学生も、様々な経歴や年齢の、農業を志す若い「力」が全国から集まってきました。

厳肅な雰囲気の中式典は執り行われ、農研機構堀江理事長の挨拶、校長訓辞に続いて、農林水産大臣官房藤本参事官を始め、茨城県、つくば市などたくさんの方々の来賓の方々から、あたたかいご祝辞を頂きました。

佐々木校長は訓辞の中で、「この二
年間に、しっかりと視野を広げ、知の
引き出しを整え、そして考える力を
身につけて下さい」と新入生に対して
激励の言葉を述べておりました。

31名全員が、全国各地で活躍する
立派な農業経営者となってくれるも
のと期待しております。



△ 入学式が行われた農業者大学校講堂の様子

農業者大学校公開講座 (中国四国ブロック大会)



△ 有機栽培のしょうが畑にて (卒業生は9人)

7月18～19日に高知市で公開講座(中国四国ブロック大会)を開催しました。

高知県は有機農業が盛んなこともあり、金子美登さん(1期生)の「有機農業の人づくり、地域づくり―実践40年の現場から―」をテーマにした講演には、一般の農業者もあわせて50名が参加しました。有機農業という言葉ができる前から実践されてきた金子さんのお話は一つ一つに説得力がありました。

そして、最後に「21世紀は「耕す文化」そして「美しい農の世紀」と締めくくられたのが印象的でした。

翌日は、大豊町の農業見学に向かいました。切り花栽培農家、有機農業に取り組む新規参入者及びログハウス(農家民宿と喫茶店を兼ねたお店)も経営する4期生渡辺則夫さんの農園を回りましたが、急峻な山間地という厳しい条件にめげず、皆さんとても積極的な農業経営を展開していました。

農業者大学校 サマーセミナー 2010



△ セミナーが行われた農者大講堂のようす

8月3日から5日までの3日間、全国の道府県農業大
学校等の学生を対象に、昨年引き続き第2回目とな
る農業者大学校サマーセミナーを開催しました。
北は青森県から南は沖縄県まで、総勢37名の学生が
集まりました。
今年も技術面に重点をおいて「環境保全型農業・有機
農業」をテーマに取り上げました。セミナーの中で、環境
保全型農業・有機農業に関する第一線の講師による講
義、有機農業を実践する農業経営体の見学、学生同士に
よる意見交換会等を行いました。
最終日の締めくくりとして、「新しい時代の農業の有り
方としての有機農業」というテーマで実施した、学生から
の質疑を含めた中島紀一氏と残見彰宏氏との対談は学
生にとって目からウロコのパログラムであったようでした。
またセミナー初日には交流会としてバレーボールを行
い農者大の職員も参加して心地よい汗を流したのは学生
同志が互いに打ち解けあう上でよかったです。

祝！全員合格 大特・けん引免許



△ 運転試験のようす

11月4日から11日までの約1週間、茨城県水戸市に
ある農林水産研修所つくば館水戸ほ場で、大型特殊免
許（1年生）と農耕車限定のけん引免許（2年生）の技
術研修を受講しました。
研修最終日の運転試験に合格すれば、それぞれ免許
が取得できるとあって学生の表情も真剣です。どの学
生も日が暮れるまで運転コースで練習を重ねていま
した。
研修最終日は朝から雲ひとつ無い小春日和となり、
絶好の試験日和となりました。
どの学生も緊張した様子でしたが、約1週間みっちり
と練習した成果を発揮して、全員きびきびとした走
りで、しっかりと運転していました。
気になる試験の結果は、みごと全員合格となり、笑
顔で研修を終えることができました。

伝統の豊饒祭 今年も大盛況！！



△ 豊饒祭のようす

農業者大学校では、つくばに移転する前の多摩時代か
ら、毎年11月に「豊饒祭（学園祭）」を開催してきました。
40回目となる今回の豊饒祭は、晴天にも恵まれて、つ
くば市近隣の方々など、昨年の1.5倍となる約千数百人が来
場され、大盛況となりました。
会場の校舎前には、全国各地の卒業生や在校生から提
供された色とりどりの野菜や果物などが並び、お客さん
の中には開催時刻を待ちきれずに、準備中に品定めをす
る方もいて、学生、職員ともども嬉しい驚きとなりました。
農産物の販売以外にも、ギョーザやフライドポテト、
豚汁等の和・洋・中の模擬店が会場を賑わし、またプロ
のマジシャンによるマジックショーや、学生も参加した手打
ちそばの実演など注目のイベントが目白押しでした。
今年も大盛況だった伝統の「豊饒祭」、学生達の良い思
い出のひとつになったと思います。

お知らせ

本校を取り巻く状況の変化

つくばにおける新しい教育課程が発足して満3年になろうとしています。昨年3月には、最初の卒業生23名(41期生)を世に送り出し、今春3月には25名(42期生)が巣立っていく予定です。41期生、42期生とも約半数の非農家出身者を含めて90%以上の就農率を達成することができました。

このように新教育課程のねらいの一つである農外参入就農者の創出についての成果をアピールすることによって、入学志願者の確保に向けて大きく一歩を踏み出そうとしていた矢先の昨年4月27日、行政刷新会議の事業仕分けにおいて、農業者大学校は「廃止」(ただし、廃止時期については在学者に配慮)との評価を受けました。

ここでは、①事業仕分け後の動向、②農業者大学校の今後、及び、③平成24年度以降の農業経営者育成教育について、説明・報告いたします。

①事業仕分け後の動向

4月28日(事業仕分け翌日)、赤松農林水産大臣(当時)は、在学生に対し、「卒業まで責任を持って対応するので、安心して勉学に励むよう」、文書での呼びかけを行いました。また、4月30日、民主党の農林水産関係議員が校長からヒアリングを行うとともに、6月15日、6名の議員が農業者大学校を訪問し、在学生との意見交換等を行いました。更に、6月にかけて、同窓会の要請書の提出、在学生の自主的な署名活動、農業者大学校教育応援団有志の皆様による緊急アピールの

発表等の動きがありました。

こうした中、農林水産省は、在学生や同窓生などの農業者大学校関係者や学識有識者を集めた「農業者大学校の今後のあり方に関する意見交換会」を8月から11月にかけて3度にわたり開催し、農業者大学校の農業経営者教育の評価、農業経営者育成教育を行う必要性の明確化、新たな農業経営者育成教育のあり方等について検討を行いました。

これらの状況を踏まえ、農林水産省は12月24日、以下の方向で見直しを行うこととしました。

● 現行の農業者大学校における教育は、在学者が卒業する23年度までとする。

● 24年度以降の農業経営者育成教育については、

① 6次産業化など新たな展開をリードする人材

② 国際的な視野を持ち、高い技術力を活かして先進的な農業を展開する農業経営者の育成に重点を置き、他の教育機関にない内容に抜本的に見直す。具体的な運営主体や仕組みについては「食と農林漁業の再生推進本部」における検討と整合を持ったものとする。

②農業者大学校の今後

平成23年度の入学者募集を中止しましたので、平成23年度は2年生31名のみが在学

することになりますが、学生全員が志気高く落とさず、しっかり学び、立派に今までの以上に良い形で就農していけるように取り組んで参りたいと職員一同考えております。

なお、現行の農業者大学校における教育は24年3月までとなりますが、これまで学校として担ってきた資料の管理や卒業生ネットワークのコアとしての機能などの継承について、農研機構本部、農林水産省、同窓会など関係方面と相談しつつ、適切に対応していく必要があると考えております。

③平成24年度以降の農業経営者育成教育について

平成24年度以降の農業経営者育成教育の方向性については①のとおりですが、その具体的な運営、教育内容等については、引き続き政府において総合的な検討が進められることとなっています。

現行の農業者大学校から平成24年度以降の新しい農業経営者育成教育に円滑な移行を行い、今後とも我が国農業を担う人材を輩出することができますよう期待しており、農業者大学校としても適切に対応して参りたいと考えています。

農業者大学校を取り巻く状況は以上のとおりですが、本校の取り組みに対しまして、皆様方の一層のご指導・ご支援のほど、今後ともよろしくお願い申し上げます。

農者大の最近の動き

◆平成22年度卒業生の卒業論文発表会

▽2月18日に、卒業論文発表会を行い、25名が自らが追求する農業や地域づくりの将来像等について発表しました。

◆農業者大学校公開講座九州ブロック大分大会

▽2月19日、20日に、大分県日出町において公開講座を行いました。当日は、卒業生のパネルディスカッション、篠原農林水産副大臣、広瀬大分県知事の講演が行われ、約180名が参加しました。

◆平成22年度卒業式

▽3月4日、13時30分〜14時45分に平成22年度卒業式を本校講堂にて挙行します。

農業者大学校広報誌

のうしゃだい 第3号

<発行日>

平成23年3月1日

<編集発行>

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構
農業者大学校 企画管理室 企画チーム

〒305-8523

茨城県つくば市観音台2-1-12

TEL 029-838-1025

http://farmers-ac.naro.affrc.go.jp/

農研機構

農業者大学校